

平成24年度はJECK創立10周年にあたり、これまで培ってきた実績に加え、次の10年に向けたより充実した「会員の親睦、会員による国際協力推進」を実施して行きたいと思っております。

一方この一年の間に、アラブの春、ミャンマーの民主化、タイの大水害、東日本大震災、EUの金融危機、イラク、アフガンに替わるシリア内戦の拡大と社会、政治、経済情勢は変動を来しております。このような世界にあって平和な社会を構築するために最も基本となる貧困撲滅を目指し発展途上国援助、国際協力も各国政府を始め諸NPO団体により地道に進められています。

このような環境の下、JECK会員は主にJICA専門家として、それぞれの時代、発展途上国を中心にその地域の異文化を体験しながら、そこに貢献する技術を伝え、そこの人達とお互いに「心の懸け橋と絆」を作ってきました。JECKはこの経験を生かし、会員相互の親睦のみならず、ささやかながら国際協力、国際社会における相互扶助の一端を担う活動を行っています。

1. 会員相互の交流、親睦

本年度は特に「会員」相互の交流、参加行事を充実させたいと思っております。

- ①「会報 19号、20号」の発行:会員ページの充実
- ②ホームページhttp://www.jeck.jp(jeck→検索)の充実:会員ページ、会員投稿の促進
- ③「地域施設見学会」の実施:4月に「横浜気象台」の見学を催したが、会員の希望を募り数回の見学会(見学後懇談会)を企画いたします。
- ④「会員懇談会」の開催:会員相互の親睦と経験交流を目的にJECKの主要行事である8月の「夏季シンポジウム」をはじめ、任地地域別、専門分野別に懇談会(ビール懇談会も含む)を実施したいと思います。
- ⑤1月の「創立記念シンポジウム」は創立10周年を記念するテーマにて特に多数の会員が参加できる企画と致します。
- ⑥新規会員募集を図る:ホームページのほか、JICA「派遣ポータルシステム」の活用をはかります。
- ⑦「フイジー草の根養魚プロジェクト」をはじめ、JECKAの諸活動を協調推進したいと思います。

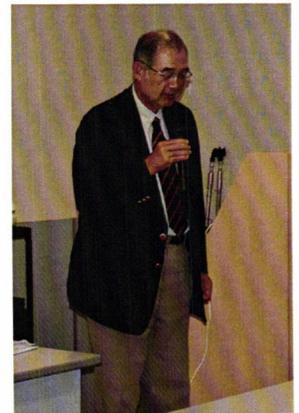
2. 県内における国際協力

- ①従来通り「国際交流行事」:10月「よこはま国際フェスタ2012」、11月「保土ヶ谷国際交流の集い」、2013年2月「よこはま国際フォーラム2013」に参加。
- ②出前講座の実施:2年半にわたりコマツ、テルモ両社の協力の下、JECK会員による国際協力の実際を講じた「横浜国立大学経済学部特殊講座」が終了し、

新たな講座を企画していきたいと思っております。又、この横浜国大特殊講座の「講義録」を記録として残したいと思っております。

3. 神奈川県海外技術研修員の推薦、支援

JECKは創立以来、平成16年 メキシコ、17年 タイ、19年、21年、22年、23年の4年エクアドルの技術研修員を推薦、選定されてきました。本年度は初めて、エクアドル、リビアの2カ国、複数の研修員を推薦し選定されたことは画期的なことです。8月から3月までの来日期間中、十分な研修と我が国文化に馴染まれ、帰国後両国交流の礎になるように支援活動を充実させていきたいと思っております。



このような活動の運営は理事会の下に事務局として下記のグループを設置し「理事」がリーダーにあたり、共に、会員の皆様全員が積極的にご参加協力頂くことにより「全員参加活動」をモットーとしてまいりたく、是非皆様のご協力、ご参加をお願いいたします。

グループ	リーダー	活動内容
事務局	植岡	総会、理事会提案事項の準備、会計、会員管理、他団体連絡
広報	大平	全体広報、ホームページ、会報の作成
企画	谷岡	新規事業の企画
催し・行事	植岡	創立記念シンポジウム、夏季セミナー、各種行事参加
出前講座	安延	各種出前講座の企画、実施
県海外技術研修員	福田	県海外技術研修員の推薦、研修支援

マレーシア日本国際工科院(MJIIT)とその教育 JECK会員 マレーシア日本国際工科院教授 若林 敏雄

1. はじめに

マレーシア・クアラルンプールに滞在して1年になる。几帳面に1日も欠かすことなく、アザン(礼拝の時間の告知)の旋律が1日5回流れてくる。これに合わせてムスリムたちはお祈りをする。卑しくもサボりたいなどと思わないのだろうか。勤勉で団結力がある几帳面な性格を有する人が多のだろうか。兎にも角にも感心させられる。これも教育のなせる技なのだろう。

教育はその国を起すと言われている。マレーシアのマハティール元首相は1982年の首相就任に際して「Look East Policy(東方政策)」を提唱した。これはマレーシアの学生を日本に留学させ、自国の近代化に役立つ技術者養成と日本の労働倫理、規律や習慣を身につけさせることなどが目的だった。

マレーシア工科大学(Universiti Teknologi Malaysia(UTM))の1つの学部としてマレーシア日本国際工科院(Malaysia Japan International Institute of Technology (MJIIT))が2011年9月にクアラルンプールにあるUTM国際キャンパスに開校した。これは元首相が10年以上も前、当時の小泉首相に要望したものであり、東方政策の集大成である。縁あって昨年10月からこの大学に籍を置いているので、大学の概要とその教育について述べる。

2. MJIITとは

MJIITはマレーシアにおける教育に日本式工学教育としての「講座制」を導入し、マレーシアにとって有能な人材を育成する大学である。九州大学、東海大学、立命館大学、大阪大学等24大学がコンソーシアムを組織し、教員を派遣するとともに、研究・教育を支援している。授業は英語で行い、OBE(Outcome Based Education)を導入し、きめ細かな、学習成果を基盤とした画期的な授業を展開している。日本からの留学生も歓迎している。2011年から2017年までの総予算は約198.3億円(内円借款63.1億円)である。円借款の用途は機材費とコンサルト費である。

MJIITの目的は、高度な技術と研究能力を有し、日本型の労働文化を有する人材を育成し、アセアンにおける地域協力を促進するとともに国際競争力強化に

貢献することである。プログラムとしては、電子システム工学(Electronic System Engineering(ESE)), 機械精密工学(Mechanical Precision Engineering(MPE)), 環境グリーン技術(Environment and Green Technology(EGT)), 経営技術(Management of Technology(MOT))の4つのプログラムからなる。ESEとMPEはいずれも大学院と学部からなる。大学院は博士課程と修士課程からなり、いずれも研究による学位取得プログラムであり、授業を受ける必要はほとんどない。2013年9月には日本型の授業と研究による修士の学位を取得できるプログラムが設けられる予定である。現在、EGTは大学院のみで、2013年より応用化学として学部プログラムが設けられる。MOTは大学院のみの構成である。

MJIITのカリキュラムでは、科目をコースと呼び、1コース当たり50分の授業を週4回行い、1学期に14週間の授業が設定される。15週目はまとめの週であり、各自これまでの授業をまとめると共に質問等があれば、研究室に向向くことになっている。その後、3週間の最終試験期間がある。試験は3回あり、内2回は授業期間中に行われ、3回目の最終試験は少なくとも150分で行わなければならない。コースの評価は授業中の2回の試験がそれぞれ20%、レポートが10%、最終試験が50%で行われるのが一般的であるが、シラバスである程度自由に設計できる。こうして合格すれば3単位を取得できる。成績はA+, A, A-, B+, B-, C+, C-, D+, D-, Eの13段階で評価され、C-以上が合格である。卒業に必要な単位数は135単位以上である。修業年限は学部4年間、修士2年間、博士3年間である。

MJIITにおける研究はiKohzaを中心に行われる。現在9つのiKohzaがあるが、その内の2つは協力講座である(表1)。これは日本の大学の講座に相当するものであるが、その弱点を発展的に改善したもので、「innovative Kohza」即ちiKohzaと名付けられた。講座は、教授、准教授等の数名のスタッフ、研究員と大学院生、学部生からなり、それぞれ研究とそれに必要な教育を実施する。研究機材とそのメンテナンス費として年間約750万円(最大)が支給されるが、研究費としては配算されないため、別途調達しなければならない。研究費としてMJIIT全体で2012年においては約3320万円が予算化されている。